

# 働けば貧乏はない

肩書きのない語りべ。みよ子おばあさんの話を聞いてそう思いました。みよ子さんのブーズー弁が普通に読め、そこに美しさをも見いだしていただけるなら、皆さんの脳裏には、皆さんの親が主人公として登場する昭和の情景が二重写しになっているのかもしれない。

正恵 何年生まれですか？

みよ子 小野寺(三浦)富士子先生に

みよ子 大正十二年の十二月。私は萩の松田で生まれたの。父は松田

みよ子 小野寺(三浦)富士子先生に

みよ子 大正十二年の十二月。私は萩の松田で生まれたの。父は松田

みよ子 小野寺(三浦)富士子先生に

みよ子 大正十二年の十二月。私は萩の松田で生まれたの。父は松田

みよ子 小野寺(三浦)富士子先生に

みよ子 大正十二年の十二月。私は萩の松田で生まれたの。父は松田

みよ子 小野寺(三浦)富士子先生に

みよ子 大正十二年の十二月。私は萩の松田で生まれたの。父は松田

みよ子 小野寺(三浦)富士子先生に



美里町上平針 高瀬みよ子さん(87歳)

●ひ孫の祐大君と

中埠ど北浦で、どっち側の堤防が切れつか見でる。上流が木材が流れてくる。切れるのは、お互い向こう側に切れてほしい、木材はこっちにほしい。木材どこの騒ぎではながたね。

ならわしを引き継ぐ

正恵 高瀬さんの家に来ると、家族がみな仲良く、それは神仏を大事にしているからじゃないかな、という気がするんですが…。



●小牛田町主催による第一回金婚式で、ご主人の齋さんと。平成3年、1月30日

みよ子 それはそうだね。おじいさんが、「伝え」とか「ならわし」を大切に人だったから。やんべなごどすんの好かね人だったから。んだが、うちのお母さんだつて、おじいさんが脳梗塞になつて十年間寝たげつと、私が用足しに出ていながつたりすつと、おじいさんをベツドから起こして、クルマに乗せて、花見ときは花見…、みな連れで歩つたんだよ。「だつてねえ、ばあちゃんばり出はつて、私やじいちゃんも出はらだいつちやねえ」つて、うちのお母さんはうまいの。

姉が江合にいるんだけど、そこさおじいさんを連れて行つて、クルマを玄關さ横つげして、窓あげで、中のおじいさんと姉にお茶飲みさせてきたり…。

この前私、心臓にカテーテルを入れてきたのよ。退院する日が、丁度おじいさんの命日だった。ところが一日退院を延ばされてしまった。そ

したつてお母さんがちゃんと仏壇に花をあげて、「お墓まいりさも行ってきたからねえ」つて言われた。んだが感謝してんの、言わねつて(笑)。このひ孫も真似して仏壇の前

でチンと叩いで拝むんだよ。正恵 真似ることは学ぶことです。みよ子さんが萩にいた小さい頃は親にどんなことを学びました？

勉強が遅れないように、問題を作つて、「これ持っていくて勉強してきなさいね。家族の者に必ず目を通してもらいなさいよ、そうすると身に入るから」つて渡したもんだお。私も暇をもらつたほうだが、今の下水処理場があつたまでの田んぼ道をとほと帰つてきたもんでがす。それで、先生が言つたことをかたご守つて勉強した、子守りつこしながら。次の日、誰よりも早く手をあげつと「あとの人たちは？」と先生が言う。子どもたちを張り合わせんのが上手だつたねえ。遅れるなあと思つた子にも、かつつがせる(追いつかせる)ように必ず問題をあずげだもんでがす。わがるように、わがるように、親よりやさしく教えだ先生でがした。

正恵 青年学校というのがあつたんですよね。

みよ子 あつたよお。十六、七歳のころだつたべが。裁縫の時間とかがあつた。戦争が始まつた始まんねがの境だつたが、わら人形を作つて、竹槍の稽古とかね。「位置について、よい、どんつ。はい突いてえ！」…そんな時代だつたが、食べ物はない、警沢もできない。家さ帰れば養蚕やつてる人は桑とり。ひとつご二三百円のこづかい貰うのがよくてみんな働いたもんでがす。

みよ子 私の父が御山(おやま)さま毎年通つた人だつたが。

正恵 出羽三山？

みよ子 そう。そのころは帰つてくるまで「水ごおり」とつて待つた。屋根さは「たらばし」つ編んで、お幣束を立てた。無事到着すると、なんのまじないなんだか「親も繁盛の大ごおり、大ごおり」と言つて、父の広げだまつたをくらせらいたもんだがす。父は御山で、あげほげ(供養)の仕方を教わつてきてそのとおりにやるように私は躰けらいたの。

正恵 素晴らしい文化があつたんですね。

みよ子 そうだよ。行つた人たちが帰つてくるまで生ものは喰つてダメだどがね。今の人たちはそんなことしなくなつたし、行く人も行きながら喰つてつちや(笑)、バスの中で酒飲んでスルメかじつてねえ。

月夜に麦を蒔いた

みよ子 今の人たちは幸せさあ。つとめがあつたから。昔はつとめというのながつたが、なにかが商売しなきゃダメだつた。私たちがつて子ども育つたあたりは、日手間

ばりでは大変だが、いろんなことをやつた。どこの家でもどぶろくを作つた時代だつたが、イースト菌売りをした。原の、黒江の五月お

正恵 で、十八歳で嫁いだわけですね。今野建司さん宅には、何年までいたんですか？

みよ子 昭和五十五年だつたね。私は三十三歳だつた。江合川を広げるためにここさ来たの。「赤すつぽ」ゆつて、年祝いと新宅振舞どいっしょにしたつたが覚えでる。五十年目で、今度は孫に家を建て替えてもらつたの。

あのころは基礎検査もなにもなくて、羽山堂の土をトロツコで運んで田んぼをわら埋めたで建てた。地震きたり大風が吹くと、揺れて揺れて大変だつたね(笑)。それでもブルが来てババババツと壊されつときは畑の陰さ行つて泣いた。

正恵 想い出がしみこんでいますものねえ。

みよ子 やつぱり柱一本ずつ積み重ねて、苦労して家にしたのだからね。立派な家さ入れられて、今はなにも言つてないです(笑)。

正恵 江合川は氾濫したんですか？

みよ子 したの、しよつちゅう。羽山堂が切れて、杭掛した麦が家の前を流れていった。ここんどは袋になつたが大雨降つと水かさが増してタプタプつた。目の前の堤防がザツと落ちんのが見えた。おつかながつたねえ。ネギなんか堤防がらみ、どどん流れたんだよ。

「お焚きあげ」八月十七日十六時、古い仏壇、御札など玄松院へ

ばあさんが麴売らつたおね。じゃあ私らイースト菌を売らましよう、ということになつて、五月おばあさんと話合つてやつた。イースト菌を、缶で買つてきて二升五合のどぶろく一回ぶんの袋さ詰めて売つた。それがまだ売れたんだね(笑)。みんな買いき来たのよ。麴が売れば、イースト菌も売れる。「随分あんだだち商いじよんだつた」つてほめらいたつたねえ。

田んぼは四反すかなつた。四反でも一町歩作つてる人たちの収入さかつつがねぐねど(追いつかなくて)と思つて歯つくつめだもんだおん。んだがら麦を蒔くとき、月夜を逃したくないよ。子どもたち寝せらがしてがら、じいちゃんと二人して畑掘りしてね、もつこ担いで堆肥を入れて、月あるうちに麦を蒔いた。それでも全然こわくなつた(疲れなかつた)ね、若がつたがら、若いときの苦労は買つてでもしろ、というのは本当だね。

梅干し、大根、味噌で、お湯かけご飯喰つてきたげつとたいした病氣もしねでこここまで生きてきた。働けば貧乏はないつのも本当つしや。